

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520632

研究課題名（和文）リーウィウスとローマ共和政期における伝承および歴史記述の研究

研究課題名（英文）A Study on Livius' Historiography and the Historical Tradition of the Roman Republic

研究代表者

毛利 晶 (MORI AKIRA)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：60174330

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史・西洋古典・考古学

1. 研究計画の概要

本研究は古代ローマ人の歴史記述と歴史意識に関して、以下の2点の解明を主な課題としている。

(1)アウグストゥスの時代の歴史家ティトゥス・リーウィウスが著した『ローマ建国以来の歴史』の第1デカーデ（第1～10巻）をローマ史学史および伝説史の観点から、共和政末期とアウグストゥスの時代の政治文化との関係にも注目しつつ分析し、ローマ人の歴史意識に関する理解を深める。

(2)本格的な歴史記述が始まる以前、ローマ人社会では過去の記憶はどのようにして伝達されていたのか。この間を集団的な記憶が呼び起こされ、後の世代に伝承されたと考えられる場を中心に考察する。これと並んで、歴史記述が始まる以前から伝わる文字を利用した種々の記録に関しても、史料の証言内容と先行研究の成果を検証する。

これらの作業を通して本研究は、古代ローマ人の歴史記述と歴史意識の特徴を描き出し、過去に関する集団的な記憶が共和政期のローマ社会で持っていた意味について理解を深めることを目指す。

2. 研究の進捗状況

(1)「研究計画の概要」(1)で挙げた研究を行うために本研究がサンプルとして先ず取り上げたのはカミッルス伝説である。マルクス・フーリウス・カミッルスは前5世紀末から前4世紀の前半に活躍したローマの政治家・将軍で、恐らく実在の人物。しかしリー

ウィウスを始めとする後代の歴史家・伝記作家の記述ではカミッルスは理想化され、彼が生きた時代の歴史は彼の活動を中心に再構成されているらしい。そこでカミッルス伝説のうち、特にエトルーリア人都市ウエイイーの陥落、白馬を用いた凱旋式、カミッルス裁判、カミッルスの亡命と復権などの諸要素を中心に、リーウィウスおよび平行史料の記述を比較検討し、カミッルス伝説の形成・改編過程でカエサルの特権という共和政末期の政治状況が与えた影響に関して、先行研究の議論を検証した。

(2)「研究計画の概要」の(1)と(2)を架橋するサンプルとしてローマのパトリキ貴族ファビウス氏の事績を取り上げ、これがリーウィウスの第1デカーデでどう描かれているかを検討、前4世紀半ば以降、伝承に質量の両面での変化を想定しうることを確認した。次の課題として、この変化をより緻密に跡づけ、論証する必要がある。ところでもしこの観察結果が正しければ、ローマ社会で前4世紀半ば以降、過去の記憶を伝承することに対する意識の変化が生まれたと想像することができる。この意識の変化の背景に、高位の公職に就くことで国家の権力を行使し、自らの権威を高めた貴顕貴族（ノービレス）層の成立があるのではないかという見通しのもとに研究を進めている。

(3)リーウィウスが伝えるファビウス氏の事績は、ローマで初めて散文による本格的な歴史記述を行ったクィントゥス・ファビウス・ピクトル（前3世紀後半～2世紀初頭）に遡り、ファビウス・ピクトルはファビウス

氏に伝わる家伝をもとにこれらの事績を書いたと一般に考えられている。ただファビウス・ピクトルの歴史は僅かな断片しか伝わらず、またファビウス氏の祖先の事績がどのようにして後世に伝えられたのかについても、具体的なところは分からない。そこでこれらの点についての見通しを得るため、前2世紀のギリシア人歴史家ポリュビオスが伝えるローマの貴族の葬儀の習慣に注目して、これが前4世紀半ば以降のローマでは過去の記憶を伝える場として機能したのではないかと考えた。この点に関しては2010年度の研究で考察を進める。

(4)共和政期のローマ社会では、過去の記憶は単なる口承でなく、様々な物(肖像、デスマスク、記念碑、建物等)や空間と結びつけて伝えられたと考えられる。更に文字の使用も王政期から既に始まっており、過去の記憶の伝承に寄与したと想像しうる。ただ史料が乏しく、研究者の努力もほとんどが仮説に留まっている。そうした状況の中で、本研究は本格的な歴史記述が始まる以前のローマ史研究で最も基本的な史料の一つとされるファステイ(政務官表・暦)に注目し、2009年度はローマのコンセルバトリー博物館でアウグストゥスの時代に編纂された碑文を実見で調査すると共に、関係する研究を収集した。2010年度はファステイ研究の論点を整理し、自分なりの見通しをつけることを目指す。

(5)本研究にとって基本史料の一つであるリーウィウスの第2ペンターデ(第6-10巻)の完訳を目指しているが、2008年度にその前半を『ローマ建国以来の歴史3 イタリア半島の征服(1)』として出版した。後半は2011年度の完成を目指して、翻訳作業を進めている。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

(理由)2009年度は部内の評価委員長を務めたため、『年次報告書』の編集作業等で年明け後の3ヶ月はほとんど研究に時間が割けなかった。そのために同年度中に終える予定だったファビウス氏の事績に関するリーウィウスの叙述の分析とファステイに関する最新の研究の検証を、一部2010年度に持ち越す結果になった。

4. 今後の研究の推進方策

(1)時間的な制約もあるので、今後は研究の対象を以下に限定する。

①『ローマ建国以来の歴史』の分析で取り上げるサンプルは、カミッルス伝説、アウルス・コルネーリウス・コッススのスポリア・

オピーマ奉納、ファビウス氏の事績に限る。

②ローマ社会で集団的な記憶が呼び起こされた場としては貴族の葬儀に、また文字を用いた記録についてはファステイ(暦・政務官表)に、それぞれ事例を限って考察する。

(2)今年度は本プロジェクトの最終年度であり、以下の観点から過去3年の研究のまとめを目指す。

①共和政期に成立した伝承が共和政末期とアウグストゥスの時代の政治文化の中でどう作り替えられていったか。

②前4世紀半ば以降に起こったローマの支配者層の再編はローマ社会における過去の記憶の伝承にどのような影響を与えたか。

③ローマで最初の歴史家ファビウス・ピクトルはどういう意図から、何を資料として歴史を書いたのか。

④リーウィウスに伝わる伝承は、歴史研究の史料という観点から見た場合、どのように評価できるか。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①毛利 晶「Tabulae Caeritum考」『神戸大学文学部・紀要』37号(2010年)35-59頁(査読なし)

②毛利 晶「ローマによるカエレ併合と civitas sine suffragio(投票権なき市民権)の起源」『史学雑誌』第118編第4号(2009年)39-63頁(査読あり)

〔学会発表〕(計1件)

①毛利 晶「Tabulae Caeritum考 -ケーソルの譴責と古代ローマの市民権-」古代史研究会 2008年12月7日(京都大学)

〔図書〕(計1件)

①毛利 晶訳リーウィウス著『ローマ建国以来の歴史3 イタリア半島の征服(1)』京都大学学術出版会(2008年)288頁